

おばあちゃんちからの贈り物

彼氏と一緒に味わうホクホク「ちいさな秋」

「おばあちゃんちのサツマイモが一番美味しいの。送ってほしいなあ。」——葉書を投函

したおおよそ1カ月後、S子はアパートで飛び上がって喜んだ。祖父母から届いた小包は大きなダンボール箱だった。わくわくしながら、開封する。

「わおーっ」と小躍りしたくなるほどの、たくさんさんのサツマイモ。実家にいた頃、毎年秋になると、祖父母宅からサツマイモを大量にもらい、いろいろ料理することが楽しみだった。秋の最大の味覚はサツマイモ。

好きな食べ物？ と聞かれて「サツマイモ」と普通に答えるのがS子だ。早速その日、ふかしイモをする。

ホクホク。2つに割ると、黄金色の断面が鮮やかだ。栗のように甘く、幸せモード。「サツマイモ届いたよ。ありがとう！ 毎日1本ずつ食べて健康を保ちます」。すぐにお礼の葉書を書いた。「次は柿を送ってほし

いなあ」と書くのを忘れたけれど、まあいいか。

サツマイモと一緒に、もち米と栗が同封されていたので、暇な日に栗ご飯を祖母のレシピ通りに作ることにした。彼氏にメールする。

「栗ご飯作るから、食べに来ない？」

食べたい、とやってきた彼氏と一緒に味わう、ちいさな秋のホクホク感。

「おいしい？」

「うん。おいしいよ」

「よかったあ」

なんて、会話まで再現してみせるS子なのである。

あれよという間に、サツマイモはなくなり再びS子はおねだりをした。

「1人暮らしたと、食費についても考えなければならぬ。

サツマイモを思う存分食べたくても、八百屋で買うとなると結構高い」と

しつかり者の生活感覚。もちろん、「柿食えば……」と一句書き添えたそう。

感心なことに、S子はおねだりのときだけじゃなく、上京してから2カ月に1度は、祖父母に葉書を近況などを送っている。すぐに、孫の生活を心配しているような返事がくる。「だからね、栄養のあるものを

着ぐるみの中は沈黙修行

「あ、後ろのチャックは開けないで」

からだがだるくて、動かない。動かこうとすると痛い。いつも

の月曜日の朝だが、なにか違う。そう言えば……。

遠くの日曜日。小学生の子どもたちが晴れの日曜日。小学生の子どもたちがソフトボール大会に参加した。参加したといつても、ぼくは着ぐるみくん。Tシャツ1枚で、首にタオル

を巻く。着ぐるみを開くと、ぶうーんと匂う。連想するのは、高校時代の武道場。汗臭い道着の匂

送ってと頼むことは」と語る口調がなかなか「法学部テキ」だ。「祖母の心配を吹き飛ばすよい機会ではないか、と思うのよ」

「ふるさとビデオレター」でおじいちゃんとおばあちゃんの声も聞いてみたい。彼氏のことなんかもネ。ごぞんじですか？

(丘)

いかなんとも言えない。どうでもいだけれど、フアブリーズが欲しい……。

着ぐるみの中からみる世界は、ちよつと違った。足元が見えない。高齢者擬似体験もどきの感覚だ。かわい子どもたちが寄ってくる。でも、お願いだから頭を思いっきり叩かないで、振動が響いてメガネが取れそうになるからさ。

空気穴から顔を覗かせた小学生が声をあげる。

「あつ、中にメガネをかけたおじいさんが入ってるう」

ampus
NoW



このガキ、おじさんだと!? もう1回言ってみろよ。必死に歯を食いしばりながら、言葉をこらえる。なんて言っても、ぼくはみんなに人気のキャラクターだから。しゃべったりしたら、イメージが台無し、台無し。前夜の二日酔いという不健康さが、疲れに拍車をかける。どうでもいいけど、もう飽きてきたし、限界ですよ。お願いだから後ろのチャックを開けないで。ねえ、そのキミ。それを

開けると、ぼくが出てきちゃうからさ。必死に手を振り払う。でも、胴体が大きくて、後ろに手が回らない。肥満って大変だなあ。家に帰って入ったお風呂の気持ちよさと、炊き立てのご飯のいいこと。疲れはお風呂でふっとんだはずだった。頭のなかには、子どもの「おじさん」の響きがこだましている。(創)

彼女に何が起きたのか!? インドネシア。ゼミ合宿異聞

「みんな〜!!」

ホテルに駆け込んできたのはA子だ!

私たちはゼミ合宿でインドネシアへ飛んだ。2週間の長旅。A子は私用があり、1週間ほど遅れての参加だった。成田→香港→スラバヤと飛行機を乗り継ぎ、スラバヤに1泊。そして翌朝から列車に揺られ、ジョグジャカルタの私たちに合流という、1泊2日の大移動一人旅だった。

ホテルに着くなり、そのA子が「私生きてるのね!」と号泣した。いったいこの移動中に何があったのか。その夜は、部屋で「A子の一人旅報告会」となったわけである。

「それがね、スラバヤ空港からからホテルまでが大変だったのよ!」道を開こうと飛行場の人に尋ねると……腕を引っ張られ車に押し入れられた。「拉致!?」って本気で思ったけど、そんなわけがなくてね、タク

シー会社だったのよ。ホテルまでちゃんと着くか不安でさあ」。話しかけても返ってくるのはインドネシア語。英語はほとんど通じなかった。「でも、ちゃんと着いたの。ようやくホテルに到着!」と思ったら……。タクシーはホテルの前を通り過ぎていく! 「宿泊予定のホテルがどんどん遠ざかっていって、血の気がさ〜って引いたわ。私、明日の朝の日本の朝刊に出るんじゃないかって思った。日本人女子大生、行方不明」って。モール街や暗いところも通ってね。途中で「降りてみる?」って車を止めるんだよ! "No!!" "I want to sleep!" "I'm tired!!" 必死に「帰りたい」って訴えたわ。結局1時間以上連れまわされて、やっとのことでホテルに帰してくれた。運転手さんはたぶん、周辺を案内してあげるよって言ったんだわ。チップも取らなかつたから、親切心だったんだろうね。でも私の寿命は確実に縮んだよ。もう絶対あんな思いしたくない!」

涙顔の興奮はやまないのがある。ホテルでも眠れぬ一夜。翌朝、「ウトウト気分であなされたと思ったから……」コーラン(イスラム教のお祈り)が響き渡ってて。ここはドコ? 私はダレ? みたいにな。カフカの不安というやつだ。「目覚めたら毒虫じゃなくてよかつたけれど。「実は香港からの飛行機でも不安で眠れなくて。時々ホームシックで泣けてきてさ。隣の日本人に「一人で飛行機えらいね」、なんて言われたりして。私、もうハタチなのに……」。よくみるとA子の目の下には大きなクマが。ここまでほんとに怖かつたんだね、ご苦労さま。

でも、なにかテレビの「初めてのおつかい」を見ているようじゃありません? (直)



「あなたは良い子だよ」 作文にこめた少女の心象風景

「それっていいじゃんや
いの」

話を聞いて即座に返ってきた母親の言葉に、内心B子はヒヤツツとした。秋から始めた家庭教師先の女の子、Rちゃんが学校に行かなくなっているね、とちよつと話ただけなのだ

が。家庭教師先で、不登校なんですか、とぶしつけな質問もできなかった。B子が教えている間、いつもRちゃんの母親が監視するように二人のそばを離れなかったからだ。

連日のようにいじめ問題にかかわるニュースが流れている。当然だが、人々はいじめという言葉に敏感になつている。自分の教え子がいじめを理由に不登校をしているなら、なんらかの手助けをしてあげたいと思うのがセンセイである。

しかしB子は一抹の不安を抱えな

がらも、その日もRちゃんには何も聞けずに2時間を終えた。Rちゃんには、学校に通っていた頃は部活に精を出していた。性格も明るくて元気で、成績も問題はない。いじめられる理由はとくに見当たらない。

だが、その日のRちゃんは顔色が冴えなかった。それに気づいて、B子はきょうこそは聞いてみようと思を決めた。その時、である。Rちゃんは「すみません」と、そう言つてトイレに駆け込んだ。中から呻くような声もれ、あわててRちゃんのお母さんは様子を見に行った。20分ほど時間がたち、二人がトイレから出てきた。

「いままで言わなかったのです
が、実は……」とお母さんは口を開いた。Rちゃんは胃腸を患っていたの

だという。頻繁に病院に行かなければならず、ふだん生活をしていてもすぐに吐き気を催してしまうということだった。学校に行かない理由が分かったM子はひとまず胸をなでおろした。

後日、B子が教えに行くとき、机の上に原稿用紙が置いてあった。

「あなたは良い子だよ」

紅葉の京都 眠れぬ夜の一人旅

「最

近疲れてる？」。友人Sの一言に、A子は面食らった。

しばらく田舎に帰っていたのだ。

「えっ!?別に」。そうは言ってみたものの、鏡を見ると、化粧気のない沈んだ顔。そういえば、田舎でのバイト先は、実家から徒歩5分。会うのは家族と近所のおばちゃんたち

……年頃の男と話す機会
もない。

「あゝ原因はここだわ」。

という表題になつている。Rちゃん
が書いたものだった。いじめ問題
について、彼女なりに考えて書いた
作文だという。

B子はそれをコンクールや新聞社
の読者投稿欄に送ることを薦めた。
やっぱいいじめられてるのかしら、
と心配しながら。

(明)

田舎でのスローライフも、そろそろ
脱出しないと。

22歳の誕生日を間近に控え、焦り
が見えたA子の前に「京都紅葉ぶら
り一人旅」のパンフが。

赴くまま、旅行会社へ。ホテルと
往復チケットの予約をしてきたのは、
ちょうど1カ月前だった。

「紅葉の京都なんてステキ」。ま
さにいい日旅立ち」。ルンルのA
子だが、大事なことを忘れていた。

ampus
NoW

事前準備。じつは、遠足、修学旅行や引越しと何一つ、満足したことがないのだ。自分でやってみたら、うまくポストンに入りきらなかったり、「これ必要？」と家族に聞いて回ったり……。旅行＝面倒なもの、という公式まですっかり忘れてしまっていたのだ。よほど脳が鈍くなっていたことを実感したA子だが、仕方がない。

「なんとかなるものね」。ああだこうだ言いながらも、22になるもう大人である。前夜のうちに準備万端整えて、「さあ、明日だわ」。

布団に入ると、またも大事なことを思い出した。自慢じゃないけど、A子は根っからの心配性である。「朝ちゃんと起きられるかしら」と、気になって何度も目覚ましを確認したり、財布をもったかバッグをあさり始めたり、ウカウカ寝ていられない

のだった。

ウトウトとしたかなと思つたら、もう朝だった。

「振り返れば、朝——そんなタイトルの小説を見かけたような気がするが。」

寝た気もせず、東京駅から新幹線に乗って「これで少しは落ち着ける」と肩の荷がおりた時、またしてもその身に悲劇が。

ひかりに乗って数分後、胸の奥のほうかモヤモヤ……。乗り物酔いである。

京都駅についた頃には、もうフラフラ。モミジより先に、自分の顔のほうか真っ赤になっている。

「もう旅行はコリゴリ」。長い人生の旅の始まりというのに、そうつぶやくA子である。

クルツと立ち直りも早いけどね。

(花)

